

合併10周年を迎えて〜途の中〜

『私の歩いたあとには／花が咲いた
私の歩いたあとには／泉が湧いた

私の歩いた時は／荊棘の途であったが

私の歩いた時は／石くれの途であったが

こんな美しい花が／咲こうとは思わなかった

こんな清らかな泉が／湧こうとは思わなかった

ただ一歩二歩省みて／静かに歩いた

ただ一瞬一瞬心から／踏みしめて歩いた

私はやはり／いい途を歩いたのだから

荊棘の棘にもさされたけれど／石のかげらにも躓いたけれど』

明治から昭和にかけて活躍した詩人河井醉茗氏の「歩いた途」(※)と題する詩です。私が県職員を辞し、町村行政にお世話になる際、上司からの饒舌として出会った詩です。この詩に込めた想いに共感し、詩の言葉を信じ、努力の源泉にしてきた詩でもあります。

またこの詩からは、「歩く姿勢」についても考えさせられます。この詩の主人公は果たしてどう

いう姿勢で歩いたのだろうか

と。省みて静かに歩く姿勢、

心から踏みしめて歩く姿勢と

はどういう姿勢なのか。数多

の思いの辿り着くところは、

謙虚さを持ち合わせながらし

っかりとした意志で歩く姿勢

背筋を伸ばし凛として歩く姿

勢です。

さて、みなさんの期待と不

安を背負って歩んできた美郷

町が、合併10周年の節目を迎えました。みなさん

には、これまでの各般の取り組みをしっかりと受

け止めていただき、比較的順調な歩みの10年間た

つたと総括できますことに、改めて心から感謝を

申し上げます。みなさんの美郷町は、課題を着実

に解決しながら望む姿に確実に近づいています。

やや胸を張ってこうした総括ができる核心には、

みなさんの歩く姿勢、言い換えて自治に対する矜

持が存在しています。歩く姿勢は即ち生きる姿勢です。誇り高く生きたいところに必ず受容と寛容、深慮と実践が存在しています。そして困難を乗り越えるためには、そのすべてが必要です。その積み重ね結果が現在の美郷の姿です。

しかしその歩く「途」はまだまだ続きます。これからも荊棘に刺され、石のかげらに躓くこともあるかも知れません。でも私たちは前に進んでいきます。何故ならこの10年の実績があるからです。改めてその自信と決意を確認し合いたいと思います。それこそがこの度の節目に内包される大きな意義です。さあ、背筋を伸ばし歩き続けていきましょう。

※「岩波文庫 醉茗詩抄」より



美郷町長

松田知己





美郷町議会議長

高橋 猛

町が順調に合併10周年を迎えられましたことを、町民の皆様と共に慶びたいと思います。振り返ってみますと10年前、平成の合併秋田県第1号として期待と不安が入り混じった状況でのスタートでしたが、私は年月を重ねるごとにこの合併は良かった、美郷町で本当に良かったという思いを強く感じております。

国では基礎自治体の定義を、とかく人口規模で示しがちですが、私は人口ではなく面でも考えることが重要だと思います。美郷大使をしていただいている佐々木毅さんが合併前、講演の中で「合併が進んでいないのは東京と北海道である。なぜ進まないかというところと東京はあまり人口が多すぎるからであり、北海道は面積が広すぎるからだ」という話を伺ったことがあります。したが、本町は、町の中心部から車で20分くらいであり、まさに面的にも適正な規模の合併であったと思います。

きました。また人口減少、少子化問題は本町のみならず全国的な難題となってきました。グローバルにみると人の流れはまだまだ大都市に向かっており、その流れを変えるのは並大抵なことではありませんが「巨大化したものは、いつかは立ち行かなくなる」と私は思います。ふるさと回帰、里山資本主義的な思想が広がり、人々の意識が地方に向けられる時がくることに希望を持ちながら地域づくりをしていけば、まだまだ地方には豊かな魅力のある未来があると思います。

いま町は、合併当初心配された財政状況も改善され健全な状況になってきておりますが、この先、財政規模がかなり縮小されることが想定されており、より一層の経営努力が求められて

未来の美郷町に向かって